

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第973号 平成27年7月31日

ぼくはフクロウを飼っている

「ぼくはフクロウを飼っている」というのは、絵本作家の下田智美さんのお書きになった絵本の題名です。

この本は、フクロウを飼いたいと思い立った少年（コウタ）の心の成長を描いたものであり、生き物を飼うという事はどういう事か、自然を守るためには何が大切かという事を考えさせる一編となっています。

ある日少年は、森の中で宝物のように輝く一本の羽を見つけます。それは、フクロウ（梟）の羽でした。少年は、魔法使いが何時も肩に乗せているフクロウをどうしても自分で飼ってみたいと思います。そして、魔法のショーを見せる仕事で世界中を飛び回っている両親に相談します。



「とうさん、かあさん、おねがいがあるんだ。ぼく、フクロウを飼ってみたいんだ。むかしから、まほうつかいにはフクロウがつきものだし。…」

すると、少年のお母さんは「コウタ、フクロウの事、まだよくしらないでしょう？ しらべてみたら」

母親からそういわれた少年は、猛烈にフクロウの事を調べ始めます。素直ですね！！

そしてとうとう、なかなかの出来栄えのフクロウ・ノートを仕上げます。

実は、私はフクロウの事はそれ程良く知りませんでしたので、この絵本を読んで勉強になりました。

一口にフクロウといっても、その仲間はスズメフクロウ、シロフクロウ、アナホリフクロウ、コミミズク、ミナミメンフクロウ、サボテンフクロウ、トラフズク、オナガフクロウ、シマフクロウ等、実に沢山の種類が地球上の様々な環境の中で暮らしています。

また、フクロウは夜行性の鳥と聞いていましたが、活動時間は種によって違うのだそうです。

さて、少年は、フクロウの事を調べて行く内に、フクロウが暮らして行くためには、餌になるネズミや小鳥がいっぱいなくちゃならない。そのためには、ネズミや小鳥の餌になる虫や木の実が沢山必要だし、草や木や、水や土、綺麗な空気も欠かせないという、とても大事な事に気がきます。だから少年は両親にこう告げるのです。

「とうさん、かあさん、ぼく、しらべればしらべるほど、フクロウがすきになったよ。でも、すきになればなるほど、はっきりとかんじたことがあるんだ。それはぼくにはフクロウは飼えないってこと。」

今地球上では、人間の活動の影響により多くの生物が姿を消し、また、消しつつあります。

環境省では、昭和61年度（1986年度）より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行い、その結果を踏まえて環境省版のレッドデータブックを作成していますが、平成24年8月に作成された新たなレッドリスト（第4次レッドリスト）によると約120余りの種が絶滅し、約3600種の野生生物が絶滅の危機にあるとされていますので、瑞穂の国といわれている我が国においても、野生生物にとっては厳しい環境にある事を、私達は認識して置かなければなりません。

野生生物が生き残れないという事は、結局は人間にとっても良い環境ではないという事でもあります。今日、全国各地で、絶滅危惧種を守るための活動が展開されていますが、人の手でやれる事には限界があります。

忘れてならない事は、野生生物が生きて行く上で望ましい環境を守って行かない限り、野生生物を守る事は出来ないという事です。その事に気付いたからこそ、少年は「フクロウは飼えない」と思い至ったのだと思います。

最後に少年は、「ぼくはフクロウを飼っている…」と述べるくだりが出て来ますが、それは、少年が、フクロウの住む森を守るという意思表示でもあったのだと思います。

（塾頭 吉田洋一）